

学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

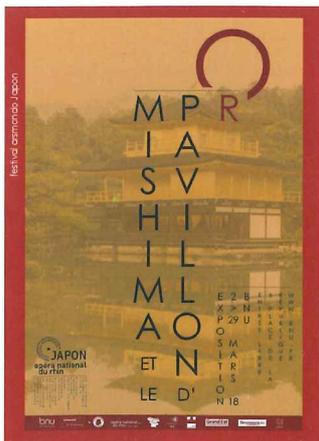
Museum Letter No.39

発行日 ● 平成30年(2018)10月22日

もくじ

- ごあいさつ・「三島由紀夫と『金閣寺』」展開催に寄せて…………… 1
 ストラスブールの三島由紀夫展…………… 2～3
 〈三島由紀夫〉の水端一学習院での日々・お知らせ…………… 4

- ・展示「三島由紀夫と『金閣寺』」平成30年(2018)3月2日～29日
- ・オペラ「金閣寺」平成30年(2018)3月21、24、27、29日、4月3日



昭和16年(1941)学習院中等科5年西組
 集合写真 2列目左:平岡公威(三島由紀夫)
 「訓育部写真帖」(学習院アーカイブズ蔵)

「三島由紀夫と『金閣寺』」展ポスター

ごあいさつ

学習院大学史料館では、平成28年(2016)の秋にパリ日本文化会館とストラスブール大学図書館で「辻邦生―パリの隠者」展を開催しました。その縁はもとより山中湖村の三島由紀夫文学館館長・佐藤秀明氏のお声がけもあって、「Arsmondo Japon」というストラスブール挙げてのフェスティバルの一環として、ストラスブール国立・大学図書館で平成30年(2018)3月に催された文学展「三島由紀夫と『金閣寺』」に、史料館所蔵の坊城俊民宛て三島由紀夫書簡を学芸員が日本から持参し展示いたしました。

本年はくしくも日仏友好160周年に相当し、9月には皇太子徳仁親王殿下が国際親善のためフランスを訪問されました。記念すべき年に日仏文化交流の一翼をささやかに担って、史料館としてとても光栄に思っています。アルザス地方の古趣豊かな町・ストラスブールに2度も往復する機会に恵まれた学芸員は、国立・大学図書館で優雅な展示方式を研鑽しそれに文化的接遇の様式美をレセプション等で学んでまいりました。

あらためて館長として、矢崎家、渡邊家の方々をはじめ、キュレーターや展示実務を担当された方々、および関係各位のご協力・厚意に感謝申し上げます。

(史料館長・坂本孝治郎)

「三島由紀夫と『金閣寺』」展開催に寄せて

ストラスブール大学では、日本語コースが30年前に始まり、現在は350人程度の学生が日本語を主専攻にしています。ストラスブールは、文化施設やイベントに恵まれているフランス首都パリから離れていることもあり、私たち教員は、できるかぎり、大学生たちとストラスブール市民が日本文化に接する機会を作るように心がけています。

抑も、2016年の秋に、ストラスブール大学に「辻邦生―パリの隠者」展をお迎えした場で、学習院大学史料館に保管される資料の豊かさを知り、史料館にある三島由紀夫関連資料を活かして、いつか三島に関する展示会も実施できたらと思いました。またその翌年の2017年、ストラスブール・オペラ座長のエヴァ・クライニッツ氏より話をいただくという偶然もありました。それは2018年3月に『金閣寺』オペラ版の上演に合わせて、社会貢献と文化普及のために、本学日本研究学科と国立・大学図書館との協力で、同作品をより深く理解させる企画ができないか、という相談でした。座長のカリスマに惹かれ、展示と講演会の企画で参加することにし、キュレーターの仕事を本学と縁があった当時オックスフォード大学研究員(現パリ・デイドロ大学准教授)トマ・ガルサン氏に、監修を三島由紀夫文学館館長である佐藤秀明氏にお願いしました。

出展の資料は一切、学習院大学史料館と三島由紀夫文学館の両館から貸していただいたので、両館の限りない協力を得なければ、展示は実現できませんでした。深く感謝しています。来館者も多かったのですが、何より嬉しかったのは、展示を見た人たちのよき反応でした。今回の展示により、フランスにおける三島由紀夫へのイメージが大きく刷新されたに違いありません。

(エヴリン・ルシーニュ=オドリ / Evelyne LESIGNE-AUDOLY
 ストラスブール大学准教授)

ストラスブールの三島由紀夫展

佐藤秀明 (近畿大学文芸学部教授・三島由紀夫文学館館長)

出発まで

フランスのストラスブールで『金閣寺』の展覧会を催したいので協力してほしいとメールで言ってきたのは、オックスフォード大学の研究員になったばかりのトマ・ガルサン氏(現 パリ・ディドロ大学准教授)からだ。トマさんは三十代後半の日本文学研究者で、三島由紀夫の研究をメインに据えているフランス人だ。2017年の夏に、共同研究者として私の勤務する近畿大学の研究室に出入りしていた。そのときはストラスブール大学の研究員で、来日中にオックスフォードの職が決まったのである。その夏、私が館長を務める三島由紀夫文学館に彼を連れて行った。関西から文学館のある山梨県山中湖村までは、車で7時間かかる。そこでの展示を見て、彼は『金閣寺』の展覧会を思いついたという。

しかし、文学展示の実務を多少は知っている私は、これは容易なことではないと直感した。一方、山中湖村はフランスとの結びつきを強めていたので、乗り気になった。トマさん、簡単に言うなよとばきながら、どんな困難があるかを想定していたとき、学習院大学史料館が辻邦生展をパリとストラスブールで開いたことを知り、相談に乗ってもらおうと私から連絡を取ったのだった。ところが、学習院大学史料館へは別ルートから展示協力の要請がなされていたのである。これは渡りに船とばかりに、その年の11月27日に史料館を訪問して、学芸員の富田ゆり氏と丸山美季氏に会い、準備の連絡を取り合うこと、一緒にストラスブールに行くことを約した。

ここにその準備の種々とその困難を書いても仕方がないであろう。主催者も日程も規模も展示作業の進行もわからず(もしかして我々が飾りつけをするのだろうかというメールで聞き合ったこともあった)、ストラスブール大学のエヴリン・オドリ准教授とトマさんからの連絡に従って、解説の原稿を書きながら出品の準備を進めるしかなかった。会場となるストラスブール国立・大学図書館のファシリティレポートさえなく、ループル並みの設備と警備だと言ってくるだけなので、山中湖村では資料の貸し出しに難色を示す声も出たほどだった(ファシリティレポートは、後に送られてきて解決したが)。

展示の概要も、『金閣寺』だけの展示からもう少し



ストラスブール国立・大学図書館

幅を広く取り、「三島由紀夫と『金閣寺』Mishima et le Pavillon d'or」展となっていった。それに合わせて展示資料も多くなった。三島文学館では、輸送の心配があることと代表作の貴重資料を展示したいという矛盾する条件をクリアするために、図書雑誌、映画演劇のポスターだけでなく、レプリカの創作ノートや原稿を貸し出すことにした。レプリカとはいえ、これで展示内容はぐっとよくなったはずである。

ストラスブールにて

ストラスブールは、パリから400キロほど東にあるアルザス地方の古い都市である。ドイツとの国境近くの町で、第一次大戦でドイツ領からフランス領となり、その後ナチスドイツに占領された。ドイツ風の木組みの家が残り、その周辺にはプロシャが建てた壮大な石の建物があって、イル川に囲まれた町の中心部は世界遺産になっている。

現地に着いてわかったことだが、文学展は「アルスモンド・ジャポンArsmondo Japon」という町を挙げてのフェスティバルの一環として位置づけられていた。街角で「Arsmondo Japon」のポスターをあちこちで見かけることになる。日本総領事館から連絡が来て行くと、吉川亨首席領事がおどけて「どんどん増殖しているようです」と言う。畑中知美領事も愉快そうに笑っている。渡仏前にわからないことだらけだったのだが、「増殖」という面白いことばで腑に落ちた。この国には、文化は統括したり管理したりするものではないという良識があるのかもしれない。

もともとは、宮本亜門氏演出のオペラ「金閣寺」が当地のオペラ座で上演されるのに際し、オペラ座の支配人がストラスブールの各団体に呼びかけて3月2日から4月15日までの日本フェス



街中に貼られた「Arsmondo Japon」のポスター



ストラスブールライン国立オペラ座

ティバルに拡大してしまったらしい。

オペラ「金閣寺」は、黛敏郎作曲、クラウスH・ヘンネベルク脚本の三島作品を基にしたオペラで、1976年6月23日にベルリン・ドイツ・オペラで初演された。日本でも何度か上演されており、その一つを私は観ている。今回は宮本亜門氏の初演出で、3月21日から4月3日までストラスブールで上演し、その後ミュルーズで、そして2019年には日本公演の予定もある。富田さん、丸山さんともども宮本亜門さんに挨拶し稽古を見学できたのは、お二人の人脈による。日本総領事館とのつながりも同様である。この展示だけでなく私までもが、彼女たちにどれだけ助けられたかしかない。

「三島由紀夫と『金閣寺』展」

さて、展示である。会期はアルスモンド・ジャポンのオープン当日の3月2日から29日まで。国立図書館で行われるオープニング・セレモニーの前に招待客に展示を見てもらふことになる。招待客には市長代理、大学の副学長、佐藤隆正総領事や畑中領事の顔も見える。つづいて私の講演もあった。

展示のキュレーターはトマ・ガルサンさんで展示実務は図書館のエマニュエル・マリーン氏が担当。マリーンさんは白木の角材を四角に組んだ大きな空間を3箇所ほど作り、日本文化の「空」を表現するというアイデアを持ち込んだ。資料の展示にも独特の空白を残し、デコラティブな三島の文体との差異を強調し、私



筆者講演
左：逐次通訳
トマ・ガルサン氏



オープニング・セレモニー



展示設置風景
ストラスブール国立・大学図書館員エマニュエル・マリーン氏



学習院コーナー



展示会場

の意表を突いてきた。

この展示で最も目を引いたのは、学習院から運んだ坊城俊民宛の三島書簡である。富田さん、丸山さんが手荷物で運び、私が頼りないボディガードを務めた資料だ。三島とは8つ年上の文芸部の先輩となる坊城俊民は、少年期の三島と毎日のように手紙のやり取りをしていた。しかし、ある時期を境に二人は離れてしまい、音信も途絶えた。そして、三島が40歳になってライフワークと称する『豊饒の海』を書き始めると交際が復活した。4巻本の『豊饒の海』の第1巻『春の雪』は、学習院学生松枝清顕の禁じられた恋の話だが、坊城は華胄界の描写がすぐれたものであることを即座に認めた。「こういう貴族を描けたとは、はるかの昔、紫式部がただけである」(『焔の幻影 回想三島由紀夫』)。展示された三島の書簡には「正にお墨附をいただいたやうなもの」とある。

オープンの日、美しい古都には時ならぬ春の雪が舞い、うっすらと積もった。この手紙をストラスブールでこういう日に読むことができたのは、幸運でしかないと思えた。28日の会期で2100人の人が訪れたというから、これも嬉しい驚きであった。



左から筆者、アントナン・ベシュレール(ストラスブール大学准教授)、丸山美季、エヴリン・オドリ、富田ゆり、トマ・ガルサン(敬称略)

佐藤秀明 プロフィール

近畿大学文芸学部教授・三島由紀夫文学館館長。専門は日本近代文学研究で三島由紀夫研究、織田作之助研究など。『決定版三島由紀夫全集』編集協力者として資料整理にあたる。織田作之助については岩波文庫3冊の解説を執筆。近著に岩波文庫『三島由紀夫紀行文集』(2018年9月14日発行)。

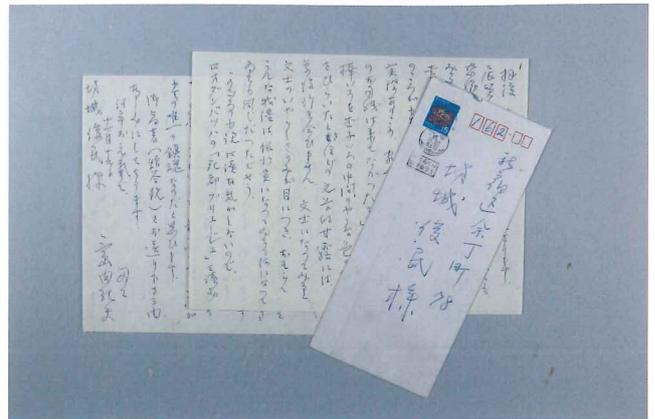
〈三島由紀夫〉の水端 ―学習院での日々

平岡公威(三島由紀夫)は、少年期・青年期という多感な時代(1931-44)を学習院で過ごした。13年間にわたる日々は、平岡公威、そしてのちの小説家・三島由紀夫の考え方や生き方を形成する上で大きな影響を与えた。中でも、文芸活動を培う風土と幅広い年代の学友との交流の存在は看過出来ない。

昭和初期、学習院では同院出身の志賀直哉(1883-1971)や武者小路実篤(1885-1976)ら白樺派および雑誌「白樺」の存在が、後輩たちを大いに刺激し、創作活動が盛んに行われていた。平岡も初等科時代から雑誌「小ざくら」に詩や和歌、俳句を発表し、頭角を現していた。

国語・漢文教授の清水文雄(1903-98)に認められ、昭和16年(1941)「花ざかりの森」で、三島由紀夫の筆名で文壇に登場するが、平岡公威から三島由紀夫となる過渡期には、「輔仁会雑誌」を主な活動の場としていた。昭和13年(1938)、「輔仁会雑誌」161号に初の小説「酸模」、「座禅物語」を皮切りに、「彩絵硝子」など次々と作品を発表した。また、輔仁会の句会や弁論大会にも積極的に参加し、編集委員も務めた。

学習院の学生の6割程度は華族や皇族の子弟であり、そのような環境下で平岡の〈雅〉に対する感性は磨かれていった。その一人、坊城俊民(1917-90)は一早く、中等科に入った平岡の文才を見出した。また、室生犀星(1889-1962)に師事していた東文彦(1920-43)や、のちに『花ざ



昭和45年(1970)11月19日 三島由紀夫より坊城俊民宛書簡

かりの森』の装幀を手がける徳川義恭(1921-49)とは同人誌「赤絵」を刊行し、互いに切磋琢磨した。彼らとの交友がもたらした影響は作品を読むことで明らかとなるだろう。

遺作「豊饒の海」の第一巻『春の雪』には東別館や血洗いの池をはじめとする学習院のキャンパスが舞台として登場し、作品世界と深く関わっていく。初等科時代の作品から三島由紀夫となってからの『花ざかりの森』、そして『春の雪』に至るまで、〈学習院〉は三島文学における重要なトピスの一つと言えよう。

(学芸員 富田ゆり・丸山美季)

学習院中・高等科文化祭「鳳櫻祭」特別展示「三島由紀夫と学習院」



会期 平成30年(2018)
11月3日(土)～4日(日)
会場 学習院中等科図書館
開館 9:00～16:00
主催 学習院中等科生徒会
協力 学習院大学史料館
学習院アーカイブズ

二〇一八年は、ストラスプール。春の雪の日のなかを一つの展示が行われていた。名作『金閣寺』の作者として知られるある人物をめぐるその展示、名を、「MISHIMA ET LE PAVILLON D'OR」。あるいは「三島由紀夫と『金閣寺』」。

“三島由紀夫”という固有名詞に記憶されている華々しい「物語」は、二十四で『仮面の告白』を書き、四十五歳にして『豊饒の海』四部作を描ききってしまう、まぎれもない天才作家でありながら、一体何者なのか、誰もが姿を知らない。彼は一体いかにして“三島由紀夫”となったのだろうか？

鍵は、青春を過ごした学習院中等科とその周縁にあるように思われる。冒頭に紹介した、かの地の展示会では、フランス詩集と並列といってもよいほど彼に影響を与えた先輩、坊城俊民との、最晩年に書かれた書簡が紹介された。本史料にて三島は、学習院中等科が自分にとって黄金時代であった、と述べている。本展は、日本初公開となる本史料を中心としながら、知られざる彼の学習院時代にスポットをあて、本名平岡公威、か弱い一人の少年がいかにして、小説家三島由紀夫となったかを見てゆきたい。三島文学とは何か？ こうした問いへ、わずかながらでも一助になれば幸いである。

さらに展示では、私たちが、独自に面白い三島作品を選出。解題を試みた。(尚、当日は、中等科生による文集を配布予定。)学習院中・高等科は昭和六十一年(一九八六)以降、文化祭のことを「鳳櫻祭」と呼んでいる。文化祭自体の起源はさらに古く、一「学習院祭」と呼ばれる、初・中・高・大全課程合同で行われる祭から独立、昭和四十四年(一九六九)にスタートした「中・高祭」を起とするならば一coming of ageという伝統をもつことになる。毎年、様々な文化部が個性豊かな研究成果を報告・発表している。

一方で、学習院は、あまたの作家・文人を生んできた。

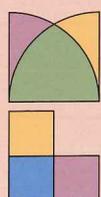
こうした私たち学習院の背負った文化の歴史と、三島文学がどのように融合するのか、どのような化学変化をもたらすのか、

皆様、是非、ご覧下されたし。

平成三十年秋 佐々木大樹(三年三組 生徒会長)

ミュージアム・レター第39号

平成30年(2018)10月22日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03(5992)1173
FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

●ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>